

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	山 田 唯 仁
2. 審査委員	主 査：（岐阜大学教授） 山 本 政 幸 副主査：（岐阜大学准教授） 隼 瀬 大 輔 委 員：（上越教育大学教授） 松 本 健 義 委 員：（岡山大学教授） 清 田 哲 男 委 員：（兵庫教育大学教授） 浅 海 真 弓
3. 論文題目	図画工作・美術科におけるソーシャルデザインに基づいた題材についての研究
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座山田唯仁から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 最終試験日時：令和6年2月17日（土） 10時30分～11時00分 場 所：オンライン 1. 学位論文の構成と概要 従来の図画工作・美術科においては、美的観点から色彩や形態を扱う技能訓練としての学習が慣例となっており、社会的な目的達成や問題解決をふまえた授業題材は乏しい状況にあるといえる。本研究は、児童・生徒が自ら問題を発見して向き合い、主体的に解決して豊かな未来を創り出していくための題材研究のために、図画工作・美術科における「問題解決的な学習」に近接する「ソーシャルデザイン」を基礎とし、授業実践を積み重ねて具体化しつつ、小中学校の学習段階に応じた教育課程モデルの構築を目的とした。 序章では、研究の背景と目的を提示する中で、これまでの図画工作・美術科におけるデザイン教育の形骸化を懐疑的にとらえ、「問題解決のためのデザイン」を位置付けるとともに、従来の消費のためのデザインに對するソーシャルデザインの定義を確認した。 第1章では、ソーシャルデザインの発展に重要な役割を果たした20世紀米国のデザイナー、ヴィクター・パパネック（1923-1998）を中心とした文献研究により、デザインが社会の諸問題を解決しうる過去の事例を探り、さまざまな実績の手法を整理した。さらに、我が国におけるパパネックのデザイン理論受容の経緯をたどり、そこから抽出した「広汎な定義」「複合的な機能」「役割と責任」の概念が教育実践に向けた示唆となることを導いた。 第2章では、昭和33（1958）年度から平成28（2016）年度改訂までの学習指導要領からデザインの目的に関する記述を抽出し、各改訂版を比較しつつ変遷の特徴を明らかにした。継続的に身近な生活を扱う題目が掲げられていたものの、デザインのもつ社会的な役割や責任に関する学習内容は乏しかったことを指摘した。しかし、現行の平成28年改訂版では社会との関わりから構想を練るデザイン指針も示されており、ソーシャルデザインの需要の高まりを確認した。

第3章では、ソーシャルデザインを基礎とした授業の具体化に向けて、小学校から中学校にかけての発達段階に応じた学習内容を構想した。現行の学習指導要領にパパネックのデザイン理論を取り入れつつ、デザインの要素として「方法」「効用」「ニーズ」「目的」「連想」「よさ・美しさ」の6つを掲げ、学習の展開を「生活や社会との関わりからねがいをもつ」「仲間とアイディアを練る」「アイデアを提案する」「振り返りとデザインの批評」に整理した。

第4章では、ソーシャルデザインを基礎とした小学校図画工作科における授業実践の事例報告を行った。低学年では「自分の生活を楽しむ」を目的として身近な材料に触れつつ色や形などの造形要素の魅力を体感すること、中学年では「他の人と豊かに関わる」を目標に仲間とのコミュニケーションを促進すること、高学年では「身近な問題を解決する」を目指して日常生活における問題発見から解決へつなげること、という3つの学習段階を構築した。

第5章では、図画工作科に連結する中学校美術科における授業実践の事例報告を行った。「幅広く問題を解決する」を目標とし、学校の内外における社会的ニーズを想定した題材について授業実践を通じて具体化した。生活を彩りつつリサイクルを必須としたブックカバーのデザイン、学校における生活空間や集団規則をわかりやすく視覚化したピクトグラムのデザイン、サステイナビリティを前提とした多用途ポスターの制作、教科横断的な視点から社会問題の解決を議論するデザイン鑑賞などの実践を経て、デザインの6つの要素との関連を確認した。

終章では、ソーシャルデザインに基づいた図画工作・美術科のあり方として、児童・生徒が問題に向き合い、主体的に解決する授業を構想・具体化した題材の意義を確認した。その上で、それぞれの学習段階における「デザインの目的」「学習の目標」「デザインのプロセス」「デザインの要素」を相互に関係付けた学習系統図を構築、教育課程モデルを提示した。さらに将来的な展開として、ソーシャルデザインに基づいた図画工作・美術科の学習内容を他領域にも関連付けつつ、社会の問題解決を多角的にとらえる教育活動に発展しうる可能性も示した。

2. 審査経過

(1) 独創性と発展性

図画工作・美術科において慣習化した美的な技能習得に終始するデザイン教育に懸念を抱き、近現代デザインの歴史的な流れに立ち返ってソーシャルデザインの重要性に着目、緻密な文献調査によるデザイン手法の分析を経て、学校教育への導入を試みる実践研究はこれまでにない独創性をもつと認められた。デザインの本質的な目的を再確認できる主題であり、問題発見から解決までの一連のプロセスを学習過程の上でさらに充実させるために、今後も継続的に取り組むべき研究課題として発展性が期待できると判定された。

(2) 教育実践への貢献および社会的貢献

ソーシャルデザインを基礎として取り組む授業の構想は、近年求められている「問題解決的な学習」を具体的なかたちで実現できる実践事例となり、段階的な学習プロセスを学校教育に導入しようとする革新的な試みであると認められた。これは図画工作・美術科という限定された教科の範囲に留まるのではなく、将来的には他領域との横断的学習の可能性を拓ける端緒として教育実践への意義ある貢献と認定された。さらにユーザー（使用者）も含めた問題解決を起点とする「デザイン思考」が一般社会に浸透しつつある今日において、義務教育段階でその前提を育むことのできる重要な社会的貢献であると認められた。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は山田唯仁の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。